■俳句を芸術に高めた俳聖松尾芭蕉

松尾芭蕉
（公益財団法人芭蕉翁顕彰会提供）

松風俳諧という独自の俳諧を確立し、俳句を芸術として高めた人物です。芭蕉は1644年に伊賀に生まれました。芭蕉は日本各地へ旅に出かけ、多くの紀行文を書きました。「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり（月日は、永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやって来る年もまた旅人に似ている）」で始まる『おくの細道』はとくに有名です。芭蕉は、旅を通じて自然や人間を深く見つめ、自己の内面を表現する新しい作風を生み出しました。

俳句は、今や海外にも「*Haiku*」として広がり、「古池や 蛙飛びこむ 水の音」は英語で「*The old pond; A frog jumps in, - The sound of water.*」などと表現され、多くの人に親しまれています。伊賀市では、毎年芭蕉の命日である10月12日に俳聖殿において芭蕉祭を開催し、俳句を募集しています。あなたも俳句を作ってみませんか。

「三重県　心のノート」ほかから

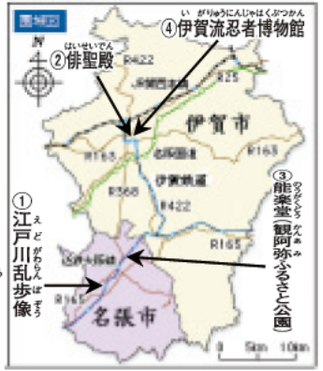
■伊賀地域ってどんな所？

奈良県、京都府、滋賀県に接する伊賀地域（伊賀市、名張市）は、古代から近世にかけては伊賀国であり、都から東方へ通ずる要所として、早くから文化が開けました。

伊賀流忍者のふるさととして知られる伊賀地域は、能楽を大成した観阿弥・世阿弥や俳聖松尾芭蕉のほか、日本の探偵小説の分野を確立した江戸川乱歩のゆかりの地です。

また、様々な滝が美しい景色を作り出す赤目四十八滝があることや、丹精込めて育てられる伊賀牛、豊かな土壌や清らかな水が育む伊賀米の生産地としても有名です。

このように、伊賀地域には、数々の文化遺産、豊かな自然や食などの様々な宝物が数多く残されています。



伊賀地域の圏域図（伊賀市・名張市広域行政事務組合提供）

（P1, 5教材「三重の文化」ほかから）

Q 伊賀忍者って本当にいたの？

忍者キャラクター
にん太としのぶ
（伊賀市観光戦略課提供）

A 映画やテレビでの「忍者」は、今や海外での日本のイメージを代表するもののーつとなっていますが、空を飛んだり消えたりできるなどと誤解された面もあります。忍者の起源には多くの説があります。戦国時代、伊賀国出身の忍者は「伊賀衆」と呼ばれ、情報を収集し、謀略などで敵を混乱させ兵力を弱める役目として、周辺各地の戦国大名に従って出陣していたようです。この頃より、伊賀衆は「忍び」と呼ばれるようになります。江戸時代になると、忍びと呼ばれた人々の子孫は、参勤交代の際の藩主の護衛役や城の門番などの役目を担当しました。忍びの術を生かして、情報収集も行っていたようです。伊賀出身の忍者として、服部半蔵、百地丹波守、藤林長門守らが知られています。

伊賀流忍者博物館

「（一般社団法人）伊賀上野観光協会」ほかから

たにおり

もっとくわしく知ろう

徳川家康の命を救った忍者

1582年、織田信長は京都の本能寺で家来の明智光秀に攻められました。この「本能寺の変」の起こる数日前から信長の招待を受けていた徳川家康は、畿内各地を見物中で、堺（大阪府）で事件のことを聞きました。このとき、家康のお供はわずか30人あまりでした。お供の中には、京都へ行き、信長の弔い合戦をすべしとの意見もあったようですが、この人数ではどうしようもありません。何はともあれ、いったんは三河（愛知県）に帰ろうとしました。そのため、家康の一行は伊賀越えをし、伊勢湾を船で渡る最短の経路を選びました。しかし、武士とはいえ少人数で抜け道を通行することは危険きわまりないことでした。家康にとっては、生涯最大ともいえるピンチでしたが、その時、お供に伊賀出身の服部半蔵がおり、半蔵が集めた伊賀衆たちの協力によって無事三河にたどり着いたといわれています。

「県史編さん班Ｗｅｂページ」ほかから

たにおり

■観阿弥創座の地

猿楽、田楽は中世（鎌倉、室町時代）の代表的な芸能です。それを洗練・発展させて「能楽」にまで高めたのが、猿楽師として有名な観阿弥・世阿弥の父子です。観阿弥は伊賀の地に生まれたといわれ、大和国（現在の奈良県）で活躍しました。後に京都に活動の場を広げ、1374年将軍足利義満に認められ、観世座の地位を確立していったといわれています。古い資料によると「伊賀小波多にて座を建て初められ」とあり、観阿弥は、名張市小波田で初めて猿楽座（後の観世座）を建てました。（※誕生の地、創座の地とも大和という説もあります）

観阿弥像（名張駅西口）

小波田地区は山々とのどかな田園地帯に囲まれ、その中にひときわ緑濃い鎮守の森があります。そこが「観阿弥ふるさと公園」です。現在は、創座の記念碑と檜造りの能舞台が建てられ、毎年11月第1日曜日には観阿弥祭が行われ、多くの人でにぎわいます。

たにおり

■日本の探偵小説の先駆者 江戸川乱歩

江戸川乱歩（本名：平井太郎）は、1894年、現在の名張市新町に生まれました。上京後、働きながら大学に通い、卒業後、多様な職業に就きましたが、海外の探偵小説にあこがれ、1923年に作家としてデビューしました。「江戸川乱歩」のペンネームは、アメリカの有名な作家「エドガー・アラン・ポー」からとったといわれています。

乱歩は、現在の鳥羽市で勤めた経験をもとに、鳥羽市を含めた旧志摩郡を舞台にしたといわれる「パノラマ島奇談」を発表するなど、1965年に70歳で亡くなるまでに多くの傑作を残しました。今年は乱歩の没後50年です。これを機会に、みなさんも乱歩の作品を読んでみませんか。

江戸川乱歩
（平井憲太郎氏提供）

「江戸川乱歩全集（光文社）」ほかから

ひとくちメモ

乱歩の代表作に、名探偵・明智小五郎と少年たちが活躍する「怪人二十面相」などの少年探偵団シリーズがあります。漫画「名探偵コナン（小学館）」に登場する主人公たちの名前は、「江戸川」や「小五郎」を参考にしています。